

■平成14年度第2回大台ヶ原ニホンジカ保護管理検討会

- ◆日 時 平成15年3月26日(木) 13:35~15:40
- ◆場 所 奈良市「春日野荘」
- ◆出席者名 検討委員/5名のうち3名が出席
関係機関/7団体のうち5団体が出席
環境省/吉井近畿地区自然保護事務所長 他
- ◆議 事 報告事項(1)「大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画」について
(2) 個体数調整について
(3) 捕獲個体分析について
(4) モニタリング調査について
審議事項(1) 個体数調整について
(2) 捕獲方法について
(3) 生息密度調査について
その他

◆議事概要

報告事項(1)「大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画」について

計画区域は、保全管理の緊急性から緊急対策地区と重点監視地区の2つに分け、さらに緊急対策地区については自然植生への影響からA1地区とA2地区に分け、A1地区については、ニホンジカの自然植生への影響の軽減を図ることとしている。今年度は10haの防鹿柵を設置する計画だったが、実際に設置できたのは7haだった。ラス巻きについては毎年3,000本を予定し、計画通り実施した。この計画は奈良県のニホンジカ特定鳥獣保護管理計画に位置づけられて実施しているものであり、本年度の結果は年度が明けた段階で奈良県に報告させて頂く。

報告事項(2) 個体数調整について

捕獲作業は4回実施した。第1回目の捕獲作業はアルパインキャプチャーのみで7日間実施し、2頭のシカがワナに入ったが、うち1頭には逃げられた。2回目からは麻酔銃を併用している。第3回目からはアルパインキャプチャーの幕を網へと改良したが、捕獲したのは麻酔銃でのみだった。ある時期からシカがワナに寄りつかなくなった。これはワナを作動させるために約150m離れた場所に待機していた作業員の気配を繁殖期のシカが感じたためと考え、シカがエサを食べるとワナが作動する方法に変更した。その結果捕獲効率が上がった。

報告事項(3) 捕獲個体分析について

目標捕獲頭数45頭に対し、オス10頭、メス15頭の計25頭しか捕獲できなかった。最低年齢はオスメスともに0歳、最高齢はメス3頭の12歳だった。食性分析の結果、全体を通してグラミノイドが高い。樹皮・トウヒについては4個体から確認された。秋に比べると冬の方が栄養状態がよかったが、サンプル数が少なく、実際の個体群の状況はまだ把握できていない。来年度以降も継続的にサンプルを収集し、データの蓄積と解析をしたい。遺伝的分析については、遺伝的多様性、遺伝的分化、ボトルネック効果の検証の結果から、①大台ヶ原とその周辺地域の個体群は1つの大

きな個体群と考えると問題はない、②この地域は遺伝的多様性が高い、③過去に急激な個体数の減少は見られず、比較的安定した個体群が今も続いているということが分かった。

委員： 年齢構成について、オスは均等に捕獲されているようだが、メスはかなり高齢個体が捕獲されていてバイアスが働いているように見える。捕獲の際に何かあれば教えてほしい。

事務局： ワナにはどんな個体が入るか分からない。麻酔銃の場合、オスは選択できる状況になかったので目撃したら撃った。ただし、メスの場合は命中度の問題を考えて、大きい個体を狙っていた。後半は目標頭数を達成するため、見つけた個体を撃った。

委員： 今回の食性分析では樹皮の出現比率少なく、ササも低い個体が多い。ササを食べていない個体が枯葉あるいは堅果類を補完的に食べているように見える。枯葉は地域によっては危機的な状況で食べるようになるというが、現場の感想を聞きたい。

事務局： 食物資源としてのササ丈はあるように感じられる。10月末頃から枯葉が高い比率で出てくるが、それまでは少ない。堅果類については、10月に急に検出されなくなったが、シカが全部食べてしまったからか、この時期から枯葉に移行しているのかは不明である。これらとササとの関係がわかると、自然再生およびニホンジカの保護管理の指標になるのではないかと思う。また、捕獲場所と胃内容物の関係を検定する必要があるかと思っている。

委員： 今後も栄養分析を行った方がよい。

委員： それぞれの個体の行動圏はそれほど広くはないと思うので、捕獲地点によって違いが出てくるのではないか。木の実が一番栄養価が高く、好んでいると思われる。奈良公園のシカは落葉直後の葉をよく食べる。グラミノイドが少なくなったので落ち葉食いということは言えないと思う。

委員： 麻酔銃で捕獲する場合の距離はどのぐらいか。また薬量調整で死んだ個体はいなかった。

事務局： 距離は平均 15~20m。麻酔銃で死んだ個体はいない。逆に麻酔が効かず追麻した個体はいた。

委員： 遺伝的分析ははっきりした結果が出ており、来年度のモニタリングでは他のことに力を注ぐのがよいのではないか。

報告事項 (4) モニタリング調査について

植生の状況について、緊急対策地区と重点監視地区において上層木の剥皮の状況を調査した。緊急対策地区で従来から実施している調査の結果を樹種ごとの剥皮率で年度別に見ると、剥皮が増えているのがわかる。重点監視地区については今回新たに調査ポイントを設置したので初期値の確認になるが、現段階でも高いレベルで剥皮が起きている。

委員： 95年の時点で剥皮率 100%のものは既に枯れているのではないか。剥皮率の過大評価になるため、枯れているものについては削除すべき。

環境省： 平均剥皮率が 100%というのは全周が剥皮されているという意味で、必ずしも枯れているということではないが、調査地は永久コードラートとして木にはナンバリングしてあり、別途データがあるので確認する。

委員： 累積被害と新規被害とは分けるのが望ましい。新規剥皮の増減により調整が効いてきたかどうかの評価ができる。また、下層植生についても関連させて検討したい。将来的な保全目標と絡めて評価しなければならず、評価システムを考えながら実施しなければモニタリングにはならない。

環境省： 主なものについて新規被害に着目したまとめ方をしたいと思う。下層植生については今年から調査を始めるので、またご相談にあがりたい。別途自然再生推進計画調査を実施しているので、こちらとも調整し、互いに有効なデータを取れるように考えていきたい。

審議事項（１）個体数調整について

事務局： 来年度は計画が始まって２年目であり、現在の状況を見ると、計画通りの４５頭としたい。ただし３年目以降については、生息密度調査、被害状況調査を勘案し、計画当初のシミュレーション通りに個体数が減っているかを検討して捕獲頭数を見直す必要が出てくると思う。

委員： 子連れ率というのは何を指しているのか。

事務局： ２０００年度と２００１年度の環境省による区画法調査において、個体識別された当歳メスの割合を１００メスあたりに換算した値。妊娠率がなければ目標頭数を定められないので、この数値をもとにした。

委員： 妊娠率など具体的に大台ヶ原のデータが出てくるとシミュレーションの値も変わってくるので、その際は評価の見直しが必要だと思う。そのため安全をとり、生息密度の目標を環境省の指導では５頭／km²だが１０頭／km²とした。来年度の終わり頃に見直すということで進める。

委員： 心配なのは、来年は目標頭数の４５頭を捕獲できるのかということ。目標達成は５年で計画しているが、捕獲数が少なければ長い期間が必要となり、最終的な捕獲頭数も増えてしまう。できるだけ早いうちにインパクトを与えた方がシカのためにもよい。

委員： シカも賢くなるので４５頭の捕獲も厳しいと思う。来年度に上乗せして６５頭を捕獲しろといっても現実とのギャップが出てくるので、原案通りとしよう。

審議事項（２）捕獲方法について

事務局： アルパインキャプチャーの改良により、１回の捕獲効率も上がってきている。来年度も改良型アルパインキャプチャーと麻酔銃を併用していきたい。３年目以降に頭数を変更する場合には、保護管理計画の中にも書いてあるように銃器を用いるなど、改めて検討したい。

委員： ３月か４月の初めに捕獲しなければ妊娠率はわからない。捕獲するのであれば当然この時期がよい。意味のあるデータも取れ、妊娠個体が捕獲できることで捕獲個体数も少なく済み、効果も大きい。

事務局： 捕獲実施が早まれば、妊娠率や食性の季節的な変動もわかるようになると思うので、協力しながら進めたい。

審議事項（３）生息密度調査について

事務局： 来年度に密度調査を行う際には、２００１年の大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画策定時に調査された１３ヶ所をベースに考えることになると思う。永久コードラートを設定

してモニターしたいと考えており、ご意見を伺いながら場所の検討をしていきたい。
また、自然再生推進事業調査との連携、調整を踏まえて計画したい。

委員： サンプルポイントが少ないと信頼性が疑われるので増やせないか。特に気になるのは、植生の調査をしている地域のシカ密度との関係である。コードラート調査は大変だが、ライントランセクト調査にすると随分楽になり、サンプルポイントもかせげる。前との比較には同じ方法が必要だが、地域を広くカバーすることが必要なので検討してほしい。

委員： 密度推定に用いている糞粒法については、この地域の糞の消失率が全く考慮されていない。これをどれだけ現実に近づけられるかという努力が必要ではないか。

環境省： 消失率実験については昨年に予備的に実施したが、時期およびマンパワーの問題でデータが不完全だった。これは検討課題とし、なるべく実施する方向で考えたい。

その他

環境省： 次の検討会についてだが、来年度の結果が出るのは2月頃でその後では間があくため、ある程度の段階で検討会を行いたい。

委員： 自然再生推進調査の動物の調査計画はこちらにも大きく影響する。モニタリングの場所などきめ細かい計画を立てる必要があり、両方に有効なデータを取るためには、調査実施前の計画段階で検討会を行うのがよい。